

同友会創立30周年記念 創立メンバー座談会

～同友会創立30周年を振り返って～



出席者

創立メンバー

安宅 勝美 ㈱ジオット 代表取締役社長
大槻 順一 大機電気通信㈱ 代表取締役会長
加藤 昌幸 アド・スタジオ 代表
遠藤 政勝 ㈱若葉会計センター 代表取締役
高野 勝重 高野グリーングループ 会長

県三役

理事長 過足 満雄 ㈱郡山大新青果 代表取締役社長
筆頭副理事長 安孫子健一 ㈱建設相互測地社 代表取締役社長
副理事長 市川 義充 ㈱福島スケッチエンジニアリング 代表取締役

司会

専務理事 大橋 栄治 ㈱リースキン郡山 代表取締役



司会 同友会は今年で創立30周年を迎えました。創立メンバーである5名の皆さんから、30年前の当時の思い出や同友会への期待など、大いに語っていただきたいと思います。46名の会員でスタートした当時は会費もたいへんで、事務局員の給料は入会金から払っていたという話も聞きましたが、(笑) まず、安宅直前理事長から創立の頃の思い出をお聞かせください。

同友会創立の頃の思い出

安宅 実は、同友会をはじめて知ったのは大槻さんからなんです。入会勧誘の1通のハガキが届きました。ところが、半年経っても音信不通なんです。私には入会資格が無いのかなと思って電話してみました。そうしたら、「実は同友会はまだ出来ていないんです」「一緒に作りませんか」というわけです。(笑) 設立準備会の集まりを何度もやりました。酒を酌み交わしながら激論を交わったのが、今でも楽しい思い出として記憶に残っていますね。

司会 設立当時から、豆腐谷局長は居たんですか？

大槻 もともと、福島地区で同友会を作ろうという動きがあり、当時すでに豆腐谷局長も一緒に準備活動をしていました。直接、私のところに話をもってきてくれたのも彼なんです。

司会 そうなんですか。加藤さん、当時の苦労話を聞かせてください。

加藤 局長は、当初、おそらく数ヶ月は無償だったんじゃないかと思います。事務所は大槻さんのビルに間借りしていました。たぶん家賃も払ってなかったんじゃないかなあ。(笑) 会費は月3千円だったと記憶しています。

遠藤 私は安宅さんからの紹介で入会しました。「今度おもしろい会ができるから来ないか」と誘ってもらいました。実は、勉強会よりも、終わってからのお酒の魅力につられて参加したのが本音ですね。(笑) ちょうど、私の事務所の開業が昭和51年で、同友会の設立準備時期とダブっており思い出深い

年でした。

高野 わが社に丹治さんと局長が来てくれ、入会を誘われました。ちょうどJCを卒業した頃でした。丹治さんとは、開成山地区で若い頃からの仲間です。「今度真面目な勉強会を作るから一緒にやりませんか」と言うんですね。仕事がなかなか参加出来ないこともありましたが、例会に出てみると、本当に真面目でおもしろい会だなあと実感しました。

司会 創立時46名だった同友会が、今では1600名という県内でも有数の経済団体に発展しました。当時の会員勧誘のご苦勞を聞かせてください。

安宅 同友会発展の要因のひとつは、何と言っても大槻さんが丹治一郎さん(現会長)を巻き込んだことですね。最初の数ヶ月は、丹治さんは参加してなかったんです。

大槻 とりあえず準備会はスタートしましたが、同友会に入ってくださいと言ってもなかなか反応がない。このままなら、この会は消えて無くなるんじゃないか。会の目的は素晴らしい。人が参加してくるポイントは何だろう。やはりトップライダーではないか。そこで、丹治さんをトップに据えることで会員が増えるきっかけになるはずだ。彼の人柄、人間的魅力をもってすれば、同友会のすばらしさ、理念が多くの方に理解してもらえるはずだ。そこで、彼を引き込んだわけです。当人は、ずいぶん逃げていたんですが、騙しにだまして口説いたというのが真相なんですよ。(笑)

司会 そうした設立当初の苦勞があったわけですが、設立5年目で200名、10周年では500名、そして15周年では1000名と倍々ゲームで会員数が順調に伸びてきましたね。その辺の発展の要因というのはどこにあったんでしょう。

遠藤 やはり一番は同友会の基本理念でしょう。良い会社をつくろう、良い経営者になろう、経営環境を良くしていこうという「三つの目的」が、皆さんの共感を得た結果だろうと思います。何と言っても同友会の魅力は、会員同士の裸の交流です。お互いの経営体験を本音で交流するということが、

時代が求めていたんだろうと思います。特に、小グループ活動（現在の研究グループ会・研究委員会活動）が会発展の大きな要因ですね。

加藤 私の思い出は広報紙（機関紙「同友ふくしま」）ですね。会の創立1周年、会員数は120人くらいでした。活動の様子を何か記録に残したいということで機関紙の第1号を発刊しました。以来、長く広報委員長をやりましたが、広報紙を通じて会員の増強にいくらかでも役立つことができたかなと思っています。

司会 機関紙「同友ふくしま」と言えば加藤さんというのは、会員の誰もが認めるところです。言わば生涯、広報委員長ですね。高野さん、当時の会活動の思い出を聞かせてください。

出会い、知り合い、学び合い

高野 やはり人と人のつながりというのが一番印象に残っています。先ほど遠藤さんの言われたグループ活動、これが当初の同友会活動発展のエネルギーになりましたね。ただ、会というのは内部だけ見ては発展しない。たまたま政策委員長をお引き受けすることになり、なんとか行政とのパイプをつくりたい、現場の経営者の声を聞いてもらいたい。県庁の課長に同級生がいたこともあり、当時の松平知事との懇談会を実現できたのがいい思い出になっています。

司会 ここで、現在の会のリーダーである県三役の皆さんに一言ずつ伺いたいと思います。同友会との出会いや学ばれたことなどお聞かせください。

市川 わたしは、いわき地区設立のメンバーの一人です。何といっても同友会の魅力は人と人との出会い、連帯感ですね。何が一体そうさせているのかなあと考えてみると、どんな会員とも同じ目線で付き合える、ということじゃないかなと思います。創立メンバーの皆さんの話を伺い、ますますそう実感しました。

安孫子 わたしが入会したのは1990年、会員数1000名達成の年です。当時、会社で急に役員に登用され、どうしたらいいか迷っていた頃です。先輩に勧められて入会しました。官公庁関係という狭い業界がら、お付き合いに限られがちです。「出会い、知り合い、学びあう」というスローガンが気に入りました。同友会との出会いが無かったら、今の自分はありません。一番良かったことは、社員一人ひとりの中に「自分が主役」という意識が生まれたことですね。私ども公共事業はたいへんな時代です。売上はピーク時から一時は5割減という時もありました。日本中がリストラ旋風の時代でしたが、わが社は、「全員で生き残っていこう」「安易な首切りはしない」と社員に呼びかけ、社員の理解を得ることができたのも同友会で学んだお陰です。

司会 過足理事長、いかがですか。

過足 私が入会したのは1987年、設立10年目のころです。忙しくてなかなか出席できませんでした。当時、研究委員長だった故小川満さん（第5代郡山地区会長）が、わざわざ会社まで訪ねてくれまして、集まりに是非来てくださいと熱心に誘ってくれました。参加してみると、その日は20人くらい

の委員会でした。皆さんが、次から次と名刺を下さるんですね。異業種の方々と話ができることの楽しさを実感しました。あの時の出会いが無かったら今の自分はありません。会のいろんな役をやらせていただいたお陰で、たくさんの友人、知人ができました。同友会の仲間は、何物にも替え難いわたしの人生の宝物です。

司会 創立メンバーの皆さんにも、ご自身と同友会という点から伺いましょう。

同友会イコール会社経営

安宅 同友会設立の頃が、ちょうど会社を立ち上げて10年目くらいの時です。社員の問題でトラブルが起きました。社長、ふだん言ってることと違うんじゃないか。待遇改善の不満です。自分の思いと社員の思いとのギャップを痛切に感じさせられました。それが、経営指針を作ったきっかけなんです。ちょうど、全国の同友会で経営指針をつくろうということが盛んに言われはじめた頃でした。

大規 わが社も、同友会設立の頃が会社を始めて10年目くらいの時です。会設立時から役員をやらせてもらいました。メンバーの方はいろんなことをおっしゃる、次から次といろんなことが起こる。そのことが、イコール自分の会社、仕事にあてはまるんですね。同友会の運営、活動がそのまま会社経営に役立ったと実感しています。同友会活動が会社経営のトレーニングの場になります。間違った経営をすれば皆さんから批判される。これは社内ではあまりありません、社長ですから。同友会活動そのものが、自分の仕事の上での訓練にダイレクトにつながる。これが同友会の魅力です。同友会の仲間からいただいた知恵や知識、経験が今の会社の基盤になっていますね。

司会 同友会イコール企業経営そのもの、ということですね。加藤さん、いかがでしょうか。

加藤 私が入会したのは38歳のときです。いまより髭も黒かったんですよ。（笑）広告代理店の業界というのは、あまり勉強する機会が無い。どうしても同業者同士の付き合いになります。同友会と出会ったことで、異業種の情報や経験が聞ける、友人もずいぶん広がりました。実は、私は1日に「同友会」という言葉を何回言えるかを自分のテーマにしているんです。

遠藤 私は35歳で入会しました。開業したのが昭和51年の2月、同友会はちょうど1年後の2月に設立しました。入会して刺激を受けた最大のは動機付け、仕事への情熱ということを学びました。私は税理士ですが、経営者としての情熱というものを学ばされましたね。若いうちに入会し、自分を磨き、刺激を受けることは大きな財産です。

司会 皆さんの話を聞いてうらやましいのは、当時の仲間がまるで兄弟のようにお付き合いしていることですね。

高野 会社の理念、基本方針がしっかりしていない人は付いてこないということを学びましたね。特に「人を生かす」ということ。経営計画書を詳し



く作りたいたいと思ひ、同友会の第4期経営指針塾で学びました。人を生かすために分社化を図りました。10年前からは、各セクションの人間が、計画書を立てるまでになってきました。

司会 同友会は「経営者の道場」、それ以上に経営者の「人生道場」という感を強くします。さて、先輩会員の皆さんの努力で1600名までになった同友会ですが、その舵取り役となる県三役の皆さんの責任も重いものがありますね。これからの同友会の方向性に話を移していきたいと思ひます。市川副理事長、いかがでしょうか。

これからの同友会運動について

市川 やはり会をリードするトップリーダーの役割、存在というのが大きいですね。私は過足理事長の下で副理事長を仰せつかりました。理事長の思ひ、人柄といひますか、実は非常に私と似ている面が多いんです。この人なら一緒にやっていこう、そんな気にさせてくれる方です。30周年記念事業を担当させていただき、30年間でこれだけ多くの先輩達の歴史があつて今がある。会の活性化のためには、同友会の魅力を語り、周りの仲間にピーアールし、先ほど加藤さんの言われた1日に何回「同友会」って言えるかを肝に銘じて理事長を支えていきたいと感じました。

安孫子 チャーターメンバーの皆さんの話を伺つて、改めて同友会の理念の大切さを実感しましたね。三つの目的、自主・民主・連帯の精神、国民とともに歩む中小企業をめざすという同友会理念が、今の同友会運動の中にどのように生かされているかを検証していく必要があるなと感じました。また、外に向けては、「地域と共に歩む同友会活動」という視点から何ができるかを改めて考えさせられました。

司会 過足理事長、いかがでしょう。

過足 創立メンバーの皆さんの苦勞話を伺つていて、心にジーンとくるものがありました。やはり同友会の一番の素晴らしさは、「出会い、知り合ひ、学び合ひ」ですね。そして「感謝の気持ち」を大切にしながら行動していきたいと感じました。同友会は、案外に外への広報という点では下手なように感じています。もっともっと同友会の良さを県内各地区で対外広報していきたいですね。会員増強の意義について言ひますと、何といひても会員が増えることは「会員の道場」を増やすこと。また、同友会には11名の事務局職員がおります。職員の皆さんが「同友会の事務局員で良かった」と実感できる給与支払責任もあります。さらには、後継者をいかに育てていくか。それと、会としての社会奉仕活動を強化していきたい。決して売名的なものではなく、同友会らしい社会貢献を考えていきたい。1月27日には県内第9番目の地として田村地区も誕生し、30周年記念大会に花を添えていただくことにもなりました。最後に、個人的な思ひとしては、一人でも多くの知人、友人をつくつて老後の人生を充実させたいなあと願つています。

司会 では、創立メンバーの皆さんからも一言ずつお願ひします。

安宅 30年間の同友会の発展を振り返つてみて、大事だったなあと思ふことは、5年に1度発表してきた中期ビジョンです



ね。発表しますと、実行しなくちゃならないという責任が生まれます。会社経営と同じですね。結果的にビジョンに謳つたことが一つひとつ実現されてきたなあと感じます。中期ビジョンは、今後も大切にしてほしいと思ひます。1995年に事業協同組合が誕生しましたが、これも第1次

中期ビジョンで(1982年発表)に「社団法人化の検討」と謳つたものです。この度発表する第6次中期ビジョンには「中小企業憲章・中小企業振興基本条例の制定」が謳われています。難しい課題こそチャレンジしていく価値がありますし、必ずや会員増強にも結びつくと思ひます。

司会 大槻さん、これからの同友会についてアドバイスがあればお願ひします。

大槻 一寸心配な点があります。と言ひますのは、30年間で同友会は大きく成長発展してきました。しかし、ポリシーを忘れないでいただきたいということ。私自身は、役員として常に同友会として今「何をなすべきなのか」を大切にしてきました。会というのは、ややもすると「効果を求める事業」に行き易いものです。見誤らない思想の確認と、それに基づく会の事業を模索してほしいと思ひます。事業協同組合については、当初は社団法人化をめざしたが不可能ということで事業協同組合になった経緯があります。任意団体である同友会と、法人である事業協同組合の論理展開上の紆余曲折はありましたが、1600名の会の運営と11名の事務局職員に対する責任論はついて回る問題です。今後、見直す時期が来るかもしれませんが、役員の方には会が崩壊しないこと、安定した職場作り、そして同友会の理念を十分踏まえながら慎重に判断していつてほしいと思ひます。

加藤 同友会の会員は20代から70代まで、50歳の開きがあります。年齢差があるから楽しい、若い人が居るから同友会に参加するのが楽しいという声もあります。運営上の難しさはあると思ひますが、年齢に応じた活動、時代にあつた活動を模索していつてほしいと思ひます。また、会員増強と共に、退会者を減らすことも大事な点だと思ひます。

高野 組織論は同感です。確かに三つの目的は重要です。同時に、官とのつながりという点を大事にしてほしい。二極化が社会問題になっていますが、われわれ中小企業は低所得者層を雇っているのが実情です。所得は多少低くても心豊かに生活できる、そんな社員教育が必要なのではないでしょうか。中小企業の安定と発展は勤勞者にとって不可欠です。それと、学者や研究者の知恵をもっと借りるべきです。「安心、安定な企業づくり」、「官・学・民」全体の構成メンバーと連携を強めていくことが大事だと思ひます。

過足 同友会を立ち上げられた創立メンバーの皆さんのご苦勞をお聞きし、今後の会運営の貴重な財産となる対談でした。誠にありがとうございました。こうした機会は年に一度は是非やりたいものですね。(笑)

司会 皆様、長時間に渡りありがとうございました。